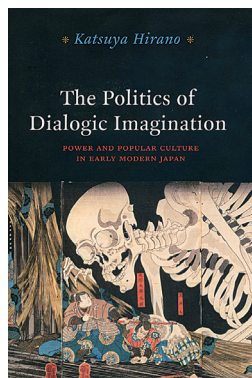


平野克弥著

『対話的想像力の政治学——近世日本における権力と大衆文化』

Katsuya Hirano. *The Politics of Dialogic Imagination: Power and Popular Culture in Early Modern Japan*. University of Chicago Press, 2013.

豊沢信子



日本近世・近代の文化史、思想史、社会理論、歴史理論を専門とする平野克弥氏の著書は、日本文化・政治史に新たな解釈学的介入を試みるものである。ミハイル・バフチンの対話主義の思想やカーニバル空間といった視点に依拠しながら、徳川時代後半から明治初期にかけて、いかに庶民文化が政治の領域と深く関わり、強い影響力を持っていたかを理論的に論証する。十八世紀後半の江戸を中心に、幕府が執拗に管理・抑制しようとした大衆文化の政治性に注目しながら、平野氏はそこに近代へ向けて時代を動かした主体形成を見出すのである。

本書の目的は冒頭で述べるように二つある。一つは、近世の大衆文化が、幕府の道徳・礼儀に基づく社会秩序と大きく隔たった

現実を露呈し、幕府の理想とした社会像に大いなる挑戦を挑んだことを叙述すること。二つ目は、ルイ・アルチュセールやフレドリック・ジェイムソン、戸坂潤などによる理論を駆使しながら、徳川から明治への革命的な変化を新たに概念化する方法を打ち出すことである。平野氏は、徳川時代に日本独特の知的発達により不完全な自我の意識が芽生え、それが明治時代に近代日本の政治的主体を構成するに至ったとする丸山説や、直線的な進化に向かう歴史像を示した、近代科学派が展開する主体形成説を退ける。こうした今までの歴史学上重要だったパラダイムと決別することにより、西ヨーロッパの歴史経験を絶対的な基準とし、日本の近代化をそのモデルに当てはまらない「差異」と位置づけた比較史

的観点から完全に脱却する。そして、日本独自の主体形成や近代化の過程を庶民文化の政治性に焦点を当てながら考察する。この試みは、政治の意味するところを意識的な政治的実践以外の大衆文化の多声楽性に見出し、大衆文化と権力構造の關係に注目することで、従来、現実逃避や権力への抵抗と見なされていた大衆文化に新たな重要性を与える。そして、庶民文化に顕れた社会關係の特殊な構造を解析し、人々がいかにその現実を「毎日の生活の中で無意識に、あるいは常識として生きて」いたかを検討する(二二頁)。

この平野氏の企ては、民衆史的な関心よりエリート中心政治から民衆を解放し、庶民に「歴史的主体」を構成させようとするのとは違い(二〇頁)、民衆が創り幕府が制限しようとした庶民の文化が、相当な範囲に相当な勢いで広まり、ある種の文化公共圏を築いていたことを論証する。幕府の道德規範を嘲笑し、批判するといった行為が読者・観客に共有されることにより、批判する者たちによる一種の社会形成の契機が生まれたと見るのだ。特に、主要都市に現れた貸し本屋が伝達力となり、すでに都市化し出版文化の発達した城下町では、庶民は物語を読む娯楽としてだけでなく、物語の内容を自分の生活経験と見比べ、取り入れる機会もあったと分析するのである。幕府が、浪費的で不経済なものとして節制しようとしながらも、制限しきれなくなった庶民文化のエ

ネルギーは、このようにして政治と複雑に絡み合い、甚大な影響力をもつて庶民の日常生活を形作っていたと見なされるのである。

本書は五章からなり、徳川幕府発足以来明治初期までという時空間が設定されているが、実際の分析は十八世紀半ばからほぼ一世紀間に焦点が置かれる。はじめの四章は、米経済の行き詰まりとともに消えていく支配層の倫理的・政治的權威を描き出す。幕府が作り出した社会關係・社会秩序の崩壊や幕府權威の退廃が、歌舞伎・浮世絵・怪奇譚・浄瑠璃物語にいかに表象されていたかを見ると同時に、幕府が示した価値観とは逆の階級制度が作り出されていく過程を読み取る。ここで興味深いのは、第一章で扱う「心中物」にしろ、第二、第三章で登場する滑稽(comic realism)や「異様」あるいは「奇怪」(grotesque realism)の風刺物語にしろ、平野氏は肉体の表象に注目し、性欲・愛情の葛藤や追求、肉体願望から発する情欲による肉体の覚醒、あるいは、非現実的な力を持つた肉体への変貌などを分析する。

ここに浮かび上がる浮世の世界は、心中や自害を認めなかった幕府の權威を否定するものであり、「心中物」の人氣は、大衆文化を通して、幕府權力の衰えが広く知れ渡っていた様子をうかがわせる。当時の人氣歌舞伎役者女形の菊之丞を扱った平賀源内の『根南志具佐』(宝暦十三「一七六三年」)の作品分析は、絵師や作家たちが、馴染み深い価値観に相反したイメージと意味を与える

ことにより、幕府が定めた身分制度に基づく関係性や価値観を倒錯させた例である。また、この頃庶民に親しまれた「和合神」の例、「累物」作品の例でも、実現しなかった侍の社会的役割が、この和合神の表象に「相反する人間性の矛盾の比喻」（二六一頁）として託されたとする。また、侍の高潔な倫理の後退、取り憑かれ情欲に動かされ行動する二重性の登場人物など、規範外れの行動が氾濫し、政治・社会思想の矛盾が文学に反映されていた状況を描き出す。欲望が庶民文化の虚構の世界に現れ、町人たちが住む江戸をはじめ、エネルギー溢れる城下町で経験され生き続けている様子は、幕府の倫理的・政治的権威が転倒され、幕府イデオロギーや社会矛盾に対する批判が、肉体表象を通して行われていた状態を物語っている。

最終章は、徳川幕府が信頼しなかった、浪費的で非経済的な庶民の肉体から転じて、日本帝国を形成する国民の肉体へと焦点を移す。個人の成功のために、そして、文明国の表象として進歩に向かう日本国民を作り出すために、明治政府は大々的な改革を企てた。ここでは例えば、風俗改良政策を採用し、資本主義的近代化を担う生産的主体の形成を図った過程が検討される。幕府が人々の肉体を信用しなかったのに対し、明治政府は、肉体から精神を対象を移し、教育令を軸に肉体と精神の関係を再改造していった。こういった政策は、演劇改良運動を助長し、美術の一環

として「小説」を創り出すなど、肉体が自己の内面を反映する中身のない殻として現れてくる過程を導き出したとする。

このように、肉体を現存権力への政治的論争の現場と見ることに、政治的圧力と庶民文化の絡み合いが肉体を媒体に浮き彫りになる。幕府政権の正統性を守るために、いかに庶民の欲望が抑圧されたかを掘り起こすとともに、庶民自身が眼と心で生活の不安や矛盾を感じ取り、想像力を駆使して創り出していく都市文化の成熟過程には、平野氏が論じるように幕府政権の行き詰まりが反映され、ついに急進的な社会転換の幕開けが訪れる。故に、多くの異質成分が交錯する江戸空間の産物である庶民文化は、権力への抵抗といった枠組みでは説明しきれない、もつと政治の中心に深く絡みついた政治勢力を構成していたと見なされるわけである。

ただ、本書は、庶民文化が批判の対象とした幕府権力や幕府の倫理的権威に言及するたびに、幕府が占めた中心性を過大評価する結果になってしまうようにも思われる。平野氏が論証するように、幕府の倫理的影響力は、人々が各自適した場所に属し、その役を果たすことを理想としたイデオロギーで保持されていた。幕府が依存したのは、言説で作り上げた倫理的価値観だったからこそ、その倫理観を攻撃するような言説には敏感だったわけである。庶民文化と政治の関係分析から見えるのは、幕府の中心性ではな

く幕府権力のもろさだという点がもつと強調されてよいだろう。

同時に、平野氏は徳川から明治への転換を断絶と位置づけるが、明治憲法が国民を臣民と定義した事実や、教育勅語に内在する徳川時代からの伝統的な価値観の連続性を考慮すると、近世的なものが近代の余白にどのように入り込み、どのように機能していたかを検討することも必要ではないだろうか。確かに、明治新政府は、資本主義の近代を勝ちぬくために、人民の肉体も含めて日本を文明開化政策で鍛え上げようとした。ただ、そこにつかわれた方法は、必ずしも近代の自我の発見だけではなく、精神訓練に関しては、特に、伝統的価値観の再生産から出た倫理観が多くあつたことは明らかである。複雑な声々が混ざり合つた複数性を体現した庶民文化を担つた主体たちが、明治新政権のもとで均質的な国民あるいは臣民に強制的に創造されていった過程は、平野氏が描くよりもつと複雑な国民、新国民編成の肉体分析が必要であらう。

とはいえ本書は、常に連続性と非連続性を内包し、複数性が交錯する社会関係の構造が、どのように庶民文化に顕在化するかを理論的に叙述し、歴史研究における庶民文化の重要性を再確認する機会を与えてくれる。庶民文化と中央政権の結びつきを真剣に考えることで、中央が何に依存しながら、どのように構成され機能していたか、牽制されていたかが見えてくる。平野氏の著書は、

十八世紀後半から発達した近世日本独特の政治や思想を生き生きと映し出し、この時代を動かしたエネルギーに満ち溢れる庶民の文化とその文化圏が、幕末政治の転換に大きく影響していたことを証言している。